

CAROWAA

CAROWAA — ちゃろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィス
の現地スタッフが名づけてくれました。ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



小学校施設の引き渡し式が行われました！

「ウガンダ北部アチヨリ地域国内避難民帰還・定住促進のためのコミュニティ再生計画」(REPRE)



3月18日、REPREプロジェクトの引き渡し式が、在ウガンダ日本大使館 中村温参事官、JICAウガンダ河澄恭輔所長、首相府Information and National Guidance局 DirectorのMayende Simon氏立会いの下、Gulu県のKiteny Owalo小学校で行われました。

プロジェクト対象35校の中で今回の会場に選ばれた同校は、もともとは地域住民が自主的に運営を始めたコミュニティスクールでしたが、同地域に公立の小学校が無いこと、運営状況が良好であったことから、このプロジェクトがきっかけの一つとなって、公立校に格上げされました。これまでは、校舎も、教員住居も、トイレもみんな住民の手作りの茅葺でしたが、このプロジェクトにより、学習環境、教員の住環境、水・衛生環境が大きく改善されました。また、メイン道路から学校につながる6kmの道は、雨期には徒歩でも通れなくなる悪路で、工事車両も動けなくなり夜明かしたこともあり。これからこの道は、通学のみでなく、周辺コミュニティの生活・経済道路としても大きな役割を果たします。

新しい教室の鍵が、中村参事官より、首相府に引き渡された。

紛争予防・平和構築無償資金協力

「ウガンダ北部アチヨリ地域国内避難民帰還・定住促進のためのコミュニティ再生計画」(REPRE)

同プロジェクトは、アチヨリ地域における国内避難民の定住を支援する為の教育施設(教室・教員住居・トイレ・井戸)、保健施設の建設、付随するアクセス道路の整備など行う約11.5億円の無償プロジェクト。

2011年には、国内避難民キャンプが閉鎖され、ほとんどの避難民は帰還したが、帰還先の教育・保健などのインフラが不十分なために多くの人々が不自由な生活を送っている。本プロジェクトでは教育・保健・水・道路などマルチセクターに対し機能性を考慮した支援を行うことで、住民の生活の質の向上に貢献する。

首相府からのスピーチでは、日本政府とJICAに対して、北部ウガンダへの支援についての感謝が述べられ、またプロジェクト対象5県に対して、運営管理の予算を確保するよう強調されました。また、今後も日本政府と協力し、北部ウガンダの支援を継続することも約束されました。

引き渡し式から2日後、今年の雨期の最初の大きな雨が降りました。新しい教室では、もう雨の心配はいりません。



新しい教室では、児童の感謝の歌に迎えられ、小学校と地域住民から、中村参事官に感謝状とヤギ1頭が贈られた。



写真上：茅葺の旧教室から、右：新教室へ
左下：旧教室内、右下：新教室内



分野	対象	内容
教育	35小学校	教室、教員住居、トイレなど
保健	3ヘルスセンター	外来棟、入院棟、医療機器など
水	21小学校と2ヘルスセンター	新規井戸の設置もしくは既存井戸の修理
アクセス道路	各施設への接続道路	道路修復及び排水管の設置

第1号管路給水施設の試験運用開始！（Kitgum県Kitgum Matidi郡）

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画(AWAT)」



AWATプロジェクトでは、75本の井戸の他、人口が密集する地域の商業センター6ヶ所に管路給水設備を建設しています。その最初の施設が完成し、運営管理のための講習会が水衛生委員会のメンバーに対して、行われました。



講習会では、給水設備の水源の井戸、貯水タンク(写真右)、12か所の給水ポイント(写真上)を回り利用水量を記録、そのデータをもとに、メンテナンスのやり方を判断する方法、壊れたタップを修理する方法などを学びました。質疑応答では、まだまだ不安そうなメンバーから次々に出される質問に、施工業者、コンサルタントの担当者が一つ一つ丁寧に回答していました。講習の最後に、水・環境省、Kitgum県関係者、JICA、コンサルタント(株)TECインターナショナルの立会いの下、水衛生委員会の代表に、施工業者(株)日さくから施設の鍵が引き渡されました(写真左下)。講習会の最中は、自信のなさそうな様子を見せていたメンバーでしたが、最後は笑顔で「大事にしていこう」との意思表示がなされました。これからは、彼らの手でこの施設の運営が始まります。



写真上：壊れたタップを実際に修理する実習。初めての修理も真剣、それを見守る施工業者担当者も真剣。

無償資金協力

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画(Acholi Water)」

本プロジェクトは、20年の国内避難民キャンプ生活を終え祖父伝来の村に戻ったアチョリ地域住民に対し、生活に必要な安全水をコミュニティ内で提供することを目指すもの。アチョリ7県で合計75本の井戸、及び6カ所管路給水施設が建設される。無償資金供与総額は、9億7千3百万円。両国間のEN締結日は、2013年7月4日で、供与の期限は、2016年8月31日。

Gulu県 World Water Day のイベントでJICAが表彰されました！



イベントが行われた、Gulu市カウンダグラウンド。グル県内で水・衛生関係の活動をしている団体が参加。グル市内の20の小学校から、児童が招待された。



揚水実験装置に群がる子供たち。子供たちのみならず、多くの参加者の興味を引いた。

3月22日は「世界水の日」、Gulu県主催のイベントが行われ、ウガンダ上下水道局、World Vision、AMREFなどととも、JICAも展示に参加しました。JICAのテントでは、吹き荒れる砂嵐に飛ばされそうになりながら、井戸掘削の作業工程、管路給水設備などの写真と、トイレ衛生関係のポスターを展示。AWATチームがテントの前に据えた、井戸のポンプの仕組みをつかった揚水実験装置は特に大人気で、子供たちが先を争って動かしていました。イベントのハイライトは水・衛生環境の改善に貢献した団体の表彰、JICAもその中の一つとして感謝状をいただきました。これからも受益者の立場に立ち、広く認知される支援活動を継続します。



JICAブースで、井戸掘削の工程の写真に見入る近所の子供たち。

北部ウガンダ農民生計向上プロジェクト（仮称）ワークショップの開催

20年に亘る政府軍と反政府軍(LRA)との抗争で、社会生活、経済活動などの面で大きな被害を受けたアチョリコミュニティですが、これまで、JICAの北部ウガンダ復興支援プログラムでは、国内避難民のスムーズな帰還を後押しするための経済社会インフラの整備、帰還した住民への行政サービスを充実させるための地方政府職員の能力向上の2分野を中心とした取り組みを進めてきました。このインフラ整備、地方政府のキャパビルが目指す先は、住民の生活レベルのアップですが、これまでウガンダ政府やドナー、そしてNGOが挙って住民の生計向上に努力してきたものの、未だ、目に見える成果は上がっていません。昨年5月に発表されたDfIDによる調査では、北部ウガンダの一人あたりのGDPが、240ドルであり、これは、ソマリアのそれと同じ程度という衝撃的な数字が明らかにされました。ウガンダ北部は、いまだ貧困の厚い雲に覆われていると言って過言ではありません。

そこで、JICA北部復興支援プログラムの3本目の柱である生計向上分野への貢献を図るために、昨年中ごろからウガンダ政府農業畜産省、地方政府との間で話し合いを続けてきた生計向上プロジェクト(NU-FLIP)が実現に向けて動き出すことになりました。本プロジェクト準備の一環で、3月初めからグル県、キトゥム県、パデル県を対象に調査が行われ、3月19日、20日には、グル市のチャーチルコートホテルでアチョリ地域7県の農業局長等、26名が集まったワークショップが開催されました。

国内避難民キャンプから戻った住民のほとんどが従事する農業ですが、生産技術及び収量レベルは低く、また、それを支える中央、地方政府の普及体制も脆弱なままです。本件プロジェクトの実施がきっかけとなり、農民の市場を意識した作物栽培とそれを支える地方政府の普及活動が定着することを通じてアチョリ地域住民の生計向上が目に見えて改善することを多くの関係者が期待しています。



ワークショップに参加したアチョリの生計向上グループ



グル県ボビ郡での農家グループからの聴き取り調査



貧しいけど明るい子供たちの未来のために

グル道路整備計画(無償資金協力)いよいよ調査が開始

グル市内の道路は、1980年代後半から始まった内戦時代以降、十分な整備が行われなまま今日に至っています。その結果、雨期になると、排水溝からあふれ出た水で道路の一部が通行不能になる、道の両側に掘られた排水溝に間違っただ足を踏み入れて大怪我をする、鋭利に剥ぎとられたコンクリート跡に車輪を取られてバイクが横転する等の危険な状況の中で市民生活が送られてきていました。一方、道路整備事業は、ウガンダ政府の最重点課題となっており、グル市を取り囲むように四方からグル市に通じる国道の整備が急ピッチで進められ、グル市は、取り残された離れ小島のような状況になっていました。このウガンダ政府の道路整備が全て中国企業によって実施されているというのも、アフリカにおけるインフラ事業の現状を表したものとして象徴的ではありませんが。

さて、今回の無償資金協力事業は、このようなグル市の苦境に応じて、約7キロの市内の主要道路リハビリを支援するものですが、北部ウガンダの中心都市であるグル市の目抜き通りが日本の協力によって生まれ変わるなど、北部ウガンダ復興に対する日本の支援を象徴する事業になることが期待されています。



優先区間を巡り調査団と熱く議論するグル市関係者



舗装部分が見事にはぎ取られた市内道路の一部



車で通るといつでもドキドキするセクションです

桜美林大学学生 北部ウガンダ訪問



「日本にもシロアリはいますか？」ウガンダでは、ある種のシロアリは貴重なタンパク源。

2015年2月末、東京八王子市にある桜美林大学から今年も6名の学生が春休みを利用してグルを訪問されました。昨年度に続いて2度目の訪問になりますが、カンパラを入れた全行程3週間のうち、グルを中心とした北部ウガンダに1週間滞在するという北部重視の視察の旅です。

グルでは、京都のNGOであるテラ・ルネッサンスが実施するLRAという反政府勢力に拉致され無理やり戦闘行為を強要された元少年兵の社会復帰活動や、GADCという地元の農業団体の営農活動などを熱心に視察されました。

その一環で訪れたJICA協力で新校舎が建設されたAwal Kok小学校では、約50人の小学5～7年生の児童と交流会を行いました。歌や踊りの他、質問コーナーでは、お互いの質問の意図そのものが、“常識の違い”によって伝わらないという体験をすることとなりました。

日本の大学生がグルを訪問するのは、珍しくなくなりましたが、授業の一環でグルを訪れているのは桜美林大学だけです。今年は、西アフリカでのエボラ騒動で参加者が昨年の12名から半減してしまったそうですが、長い間、紛争に巻き込まれた北部ウガンダの

実態を直接に見て頂けたことは、同地域の復興のために働く我々にとっても強い味方を得た思いです。

彼らにとって、今回の旅が、これからも世界の出来事に関心を持ち続ける大きな動機づけになったことを心から期待しているところです。

「アティアクーニムレ間道路改修事業」 Up to date!

北部ウガンダの中心都市Guluと南スーダンの国境の町Nimuleを結ぶ国際幹線道路は、現在世界銀行(Gulu-Atiak間74km)と日本政府(Atiak-Nimule間36km)との協調融資によって改修事業が進んでいます。一足先に工事が始まった世界銀行の区間は90%以上が完成、工事前には数時間かかっていたGulu-Atiak間は、1時間強と大幅に時間が短縮されました。2013年7月に工事が始まった日本の融資区間も、本格的な雨期を前に急ピッチで工事が進んでいます。南スーダンの紛争の影響は大きな課題ですが、南スーダンはウガンダの最大の貿易国、一日も早い全面開通が望まれています(写真右:日本の区間の状況3月31日現在)。



安全情報:テロへの警戒その他

3月13日に行われた北部ウガンダ国連安全対策月例会議で、ウガンダ国内のテロの標的となる可能性のある4都市の一つにグルが入っており、我々が通常使用するレストラン、スーパーマーケットなどでは特に注意が必要との情報が提供されました。また、3月30日には、グル市内で銀行強盗未遂事件が発生、カンパラや他の地方都市に比べて、凶悪犯罪が少なかった印象のグルですが、警備員ものんびりしており、それゆえに今後ターゲットになっていく可能性を懸念しています。しかしこれも、グルが北部ウガンダの中心都市として急速に発展しているが故、我々もグルの変化に遅れることがないように注意を払っています。

村の井戸でルール違反!



村の井戸は、文字通り、住民の命の綱ですが、この動物達は、井戸から流れ出る水溜りで、堂々と、涼んでいます。

衛生上の問題は、甚大ですが、それにしても気持ちが良いそうです。

～人の動き～

グルの日本人人口がピークに

特集でご案内の通り、REPREの引き渡し式を終えて、最後まで残っていた三林さんが3月20日に日本に帰国しました。彼が担当したロット1(グル県)は、工事が遅れに遅れたため、三林さんは、正月返上で工事管理に当たられました。ロット1の校舎は、これまでになく品質が高いという県エンジニアの評価は、三林さんの努力に向けられた賞賛の言葉です。

こんな中、4月初めにはグル市道路整備計画調査団を迎え、グル市滞在の日本人人口が20人を越える勢いです。いろいろな事業、調査が重なりますが、安全と事故に注意して、それぞれが、充実した仕事を出来るよう出来るだけの支援をしていきます。

<編集後記>

2014年の年度末を迎え、特に3月は、アツという間に過ぎてしまいました。待ちに待ったREPREの引き渡し式、グル市内道路調査団の受入、生計向上プロジェクトのワークショップなど、それぞれに重要なイベントがありましたが、十分な準備と体制をもって臨めたかという点、少し、心残りも有ります。

そして、2015年度が、時をおかずに、やって来ました。2015年度は、JICA北部復興支援プログラムの最後の一年になります。これまで取り組んで来た事業を振り返り、必要なフォローを行い、そして2016年度以降の支援プログラムを望んで良質の事業を準備して行きたいと思えます。変わらぬ支援をお願いします。

グルフィールドオフィス 高橋嘉行・佐藤由理